

美術科教育学会通信 45

2002年6月3日発行

事務 / 通信 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室 柴田和豊宛

Tel. / 042 (329) 7608 Fax. / 042 (329) 7599 (柴田直通)

Tel. / Fax. 042 (329) 7594 (相田直通)

E-mail: /kshibata@u-gakugei.ac.jp (柴田) /aidaman@u-gakugei.ac.jp (相田)

InSEA 世界会議 ニューヨーク大会へのご案内

岡崎昭夫 (筑波大学)

1954年に美術教育の国際団体として設立されたInSEA (The International Society for Education through Art)は、現在、世界の80以上の国々の約2000人の会員を擁しているが、その31回世界会議が、本年の8月19日から24日まで、ニューヨーク市のブロードウェイに位置するマリオットマーキスホテル (Marriott Marquis Hotel)で開催されます。

大会の主題は「美術を通しての国際的会話」で、伝統、美学、精神、メディアやなどの多彩なテーマの展開によって、美術教育における国際的交流を可能にする場の設定を試んでいます。大会のプログラムとしては、5人 (人間学、建築、ダンス、教育哲学、美術館) による基調講演、5人 (J. Burton, E. Eisner, J. Steers, K. Marantz, D. Schonau) の高名な美術教育研究者による一連の連続講演、9カ国 (チリ、フィンランド、アメリカ/ガーナ、インド、イスラエル、イギリス/フィンランド/ブラジル、クロアチア、台湾、日本) の研究者達による9つの招待セミナー、世界各国からの330人以上の口頭発表が予定されています。今大会の詳細な案内は、<http://www.tc.ed/insea> をご覧下さい。また、大会参加申込みと会場ホテルの予約は、

<http://www.savethedate.com/insea> で、クレジット決済により可能です。大会事務局のコロンビア大学からの通知によりますと、600名以上の参加を期待しているとのことですが、5月はじめの時点では、参加申込みが200名で、ホテルには十分な空きがあるようですので、美術科教育学会の皆様にご参加をお勧め致します。

INSEA日本関係発表者名・題目、行事

(5月19日付発表プログラムからの抜粋)

1, Dr. Masami Toku, Children's Artistic and Aesthetic Development: The Influence of Pop-Culture in Children's Drawings

2, Dr. Kazuhiro Ishizaki, Co-presenter: Dr. Wenchun Wang; Re-Considering the Characteristics of Japanese Students' Art Appreciation from the Viewpoint of Repertoires.

3, Professor Motoki Nagamori, Co-presenters: Professor Tomotoshi Shiomi, Professor Kinichi Fukumoto, Professor Yasuaki Matsumoto; The Development of an Interactive Table for Education of the Senses, Connecting the Human Body with Digital Media.

4, Ms. Motoko Owaku; Creative Eyes.

5, Mr. Yoshio Sato; Discover Origami: New World Visions.

6, Mr. Nobuo Yamaguchi; The International Dialogue through the Analysis on the Art Textbooks of Junior High Schools in Japan.

7, Ms. Miyuki Otaka; Multi-Generational Art Workshops in an Indigenous People's Village in the Deep Mountains of Northern Thailand.

8 , Mr. Sadao Koyama, Co-presenter: Mr. Masayuki Ishii ; Japanese Curriculum Reform and Its Impact on Junior High School Art Education.

9 , Dr. Brent Wilson, Co-presenter: Dr. Masami Toku; Learning the Graphic Languages of Art: The Influence of Japanese Pop-culture on Children's Drawings.

10 , Mr. Hideshi Uda; Present Conditions and Perspectives in Art Class: Educational Reform During the Period from 1977 to 2001 in Japan.

11 , Dr. Akio Okazaki; Arthur Wesley Dow and His Addresses of 1903 in Kyoto, Japan: What he said to Japanese Audience.

12 , Ms. Koko Okano; Japanese Educational Reform and the Role of Art Museums.

13 , Mr. Hiroshi Ueyama; How to Use Computer Graphics in Art Education.

14 , Professor Takashi Koizumi; Considerations on the Changes in the Course of Study and School Textbooks of Arts and Crafts.

15 , Associate Professor Ms. Akari Kitamura, Co-presenters: Mr. Masashi Kitagawa, Professor Kinichi Fukumoto; A Study of Zen Influence on Andy Warhol's Life and Art. A Reflection of "Nothing" in his 60's Works.

16 , Yukio Iwasaki ; The Development of Art Curriculum Based on Children's Interests and Needs.

17 , Ms. Yuuka Sato; Co-presenter: Professor Kinichi Fukumoto; National Museum of Ethnology's Educational Package "MinPack" and its Potential Use for Interdisciplinary Learning in Schools.

18 , Professor Setsuo Terasawa ; The Fruits of Art Teaching Acquired from the Concept of Japanese Mandala.

19 , Professor Kinichi Fukumoto, Co-presenters: Professor Akira Higashiyama, Ms. Naomi Higashiyama ; Comparative Cultural Study on Children's Paintings of Environmental Issues from All over the World Based on the Save the Earth

Competition Paintings.

20 , Mr. Motohiro Miyasaka ; Evolution of Japanese Children's Pictures.

21 , Dr. Wenchun Wang; Invited Seminar Series: JAPAN - Re-Imagining Traditions of Art Education and Educational Reform in Japan.

22, InSEA Regional Council Meeting Asia/Pacific Regional

* * *

子どもはモナ・リザをどうみるか - まなざし方式 の現在 -

上野行一（高知大学）

- 1 -

子どもはレオナルド・ダ・ヴィンチの[モナ・リザ]を見てどう思うのだろうか。私たち大人はどこかでこの絵にお目にかかっているし、題名が[モナ・リザ]であることも作者のことも、謎の微笑みのことも知っている。目を閉じてもぼんやりと、その顔その姿を睨に浮かべることさえできる。

では、今まで[モナ・リザ]を見たことがない人はこの絵を見てどう思うのだろうか。何の知識も情報もないままにこの絵を見ると、人の目にはいったい何が映っているのだろうか。私たちにもかつてはそういう瞬間があった。教室の子どもたちと同じように、先入観なく絵と出会う瞬間があったのだ。

はじめて[モナ・リザ]を見た幼稚園児や小学生が、この絵に題名を付けた。この名作に、子どもたちがどんな題名を付けたのかを想像してみしてほしい。

- 2 -

想像していただけたでしょうか？

試みに、子どもたちが実際に付けた題名のひとつを紹介しよう。

「手が痛い人」。

さてこの答えをどう受けとめたものだろうか。

「なるほど、子どもらしい見方だ」と、うなずいてもいい。「おやおや、顔の表情には注目しないの。変わっているなあ」と、首をかしげることもしる。「絵の見方を教えなくてはダメだ。モナ・リザの優雅と背景に描かれた自然の荒涼との対比に気づかそう」と、首を振ることもあるかもしれない。

首の振り方、傾け方にはその人の教育観が現れている。子どもの絵の見方に対する理解と尊重の程度が現れている。

子どもは絵をどう見るのか。子どもには子どもなりの絵の見方があるはずだ。子どもの論理や考え方の特性、感性、知識、経験、関心が絵の見方に反映するのは当然のことだろう。

しかし私たちは子どもの見方を独自のものとしてではなく、大人の見方と比較して、とらえてはいないだろうか。初心者を見方を、専門家の見方に誘導するような指導をしてはこなかっただろうか。

すでに造形表現の分野では、これまでの教育に反省がおこなわれてきた。子どもの造形特性を見直すとともに、「生きる力」や「新しい学力観」に見られる構成主義的、あるいは状況論的な教育理念を背景に再構築が模索されてきた。「造形遊び」という構造化もその文脈上にある。

もはや子どもの造形表現を大人の価値基準から見たり、大人の規範に押し込めようと指導したりする教師はいないだろう。いないはずだと信じたい。

ところが迂闊にも、美術作品の鑑賞に関してはそれほど踏み込んだ変化がおこなわれてきたわけではなかった。美術に対する子どもや初心者の見方についての洞察が浅かったのである。

- 3 -

「手が痛い人」という答えからは、この子が手の組み方にとっても惹かれていることがわかる。なるほど見ようによっては、痛む手をもう一方の手でかばっているように見えなくもない。試みに絵を思い浮かべて、モナ・リザのポーズをとってみればよい。モナ・リザになってみるのができただろうか。[モナ・リザ]を見たことがあるという一般の人々の多くは、口元に微笑みを浮かべることはできても手の組み方にはとまどうはずだ。右と左どちらが上で、どのあたりで交差していたのか。

[モナ・リザ]はよく知られ、一目見ただけで誰しもそれとわかるはずなのに、実は目が細部にまでは至っていなかったことに気がつく。少なくとも「手が痛い人」と答えた子どもほどには。

注目すべきは「痛い」という表現である。教師なら、この感覚語を見逃してはいけない。「痛い」という言葉は、この顔の表情が微笑みではないことを意味する。何かの痛みに耐えている顔と、この子は見ているのだ。

セルフ・ポートレート作品の制作にあたって、モナ・リザに扮するため絵を細部まで検討した森村泰昌も、モナ・リザは「微笑んでいない」と結論している。絵全体を覆う主調音としての揺らぎ漂う印象が、微笑みのもつざわめきの感覚に似かよっているため、それが微笑みと錯覚されてきたただけだと解釈している。

微笑みという先入観が私たちの見方をゆがめてしまった。先入観を捨ててこの絵を見ることの大切さを、「手が痛い人」という答えは語っている。

自分の目で見たと印象、自分なりの解釈を語ること、そしてそれがきっかけで対話が始まり、意見の交流がなされ、思いもかけない発見をみんなで体験していくところにアートを見る醍醐味が生まれる。

この感動と満足感は子どもに限ったことではない。Web上にも寄稿したように、横浜みなとみらいでの[モナ・リザ]鑑賞の際にも、観衆の一人が「レオナルドのモナ・リザが、今夜わたしのモナ・リザになりました」と興奮気味に語り寄ってきた。参加し、体験し、創造する鑑賞は、日頃アートに疎遠な大人をも魅了する。

- 4 -

「手が痛い人」という答えを「子どもらしい」と受けとめるだけでは、子どもの作品を見て「子どもらしい」で終わらせてしまうことと大差はない。子どもや初心者の見方を価値あるものと受けとめ、その考え方や感じ方の背後へと思いをめぐらせることが必要なのであり、それは教師として当然すぎることでないだろうか。このまなざしの共有を素通りして、断片的な知識や美術を見る方法論を伝えても不毛なだけである。

とはいえ学校も美術館も、現実の鑑賞教育の実態はそれとは遠いところにあった。美術

の知識や内容の伝授に偏った、奇妙な方法論が横行していた。暗澹たる思いを抱いていた私たちに、アメリカ・アレナスとの出会いは一条の光をもたらした。ニューヨークでの評判を聞きつけた美術館・出版関係者たちが話題を日本に持ち帰り、彼女を招聘したことからすべては始まった。『まなざしの共有』（淡交社）は、その成果と軌跡をまとめた書である。

まなざし方式 は対話による鑑賞の展開と、学校と美術館との連携を大きな柱にしている。どちらもこれまで、日本ではほとんど顧みられなかった方法である。詳しくは同書に記したとおりだが、背後にはアビゲイル・ハウゼンの研究成果がある。

ハウゼンは美術作品をみる人々を五つに分類した。日本でも知られるようになったパーソンズにも「相似的」な分類法があるが、ハウゼンの研究は1970年代からの調査に基づいたものであり、6歳の子どもから80歳余までにおよぶ、性差や人種、学歴や経済状態等においてさまざまな差異のある人々約2000人を対象にした精緻なものである。

その結果からハウゼンは、人々を「最も素朴な鑑賞者」から「最も洗練された鑑賞者」までの5つの段階に分類した。そしてほとんどの人は年齢に関係なく第1段階か第2段階にあり、美的な発達は実際に美術に接することによってしか促されず、いかなる人にとっても学習は不可欠であるということを示したのである。結果として、多くの初心者の観衆に「みる力」をつけるために構成されたプログラムの必要性が強調されることになった。

ニューヨーク近代美術館の教育部長フィリップ・ヤノワインは「美術館で従来おこなわれてきた教育プログラムは、実は3段階以上の人々に向けてのものであった」という反省をもとに、来館者に対するカリキュラムを改めた。アレナスはまさにその時期、MoMAに在任していたのである。

- 5 -

話題を、学校と美術館との連携に変えよう。アメリカには、美術館と学校との連携を推進するナショナル・センターや、活動を支援するNPOがいくつも存在する。たとえばNCAMSCと略称される機関は、ゲティ財団の基金によるもので、美術館と学校との連携による成功事例をデータ・ベース化し、情報の

提供と維持・管理をおこなっている。

また、Visual Understanding in Education VUE という非営利的な団体(NPO)は、ハウゼンが構築した「鑑賞者の発達理論」を基礎理念とし、美術作品との関わりを通して子どもたちの認知発達を促進することを目的としている。NCAMSCと同様に、開発された美術鑑賞プログラムの提供や、学校の教師および美術館スタッフのためのトレーニング・プログラム、熟練者によるデモンストレーションや案内書、ビデオテープおよびインターネットによるプログラム、教室実践のための図版の提供などを広範におこなっている。

これらのセンターやNPOは地域の学校と美術館のパートナーシップを築き、美術館での鑑賞と教室での学習を取りまとめる機能を果たしている。実践者だけではなく、大学の研究者が関与して機能しているわけだが、学校、美術館、大学とそれぞれの設置形態が異なるアメリカにあっては、こうした仲介機関の存在が不可欠なのだろう。

日本の場合は、同一地域において学校は公立、美術館も公立・民営という設置形態がよく見られるにもかかわらず、両者の関係がきわめて希薄という現状がある。鑑賞教育の企画を立てて美術館側から声をかけても学校側の反応が弱く、「あまりの関心の低さに愕然とした」という声がたびたび耳に届く。これはどうしたことだろう。美術館と学校との連携を支援・推進する機関の設置は、日本においてこそ必要だと思う。まなざし方式の展開に際しては、NCAMSCのような機関の創設も視野に入れている。

これまで推進してきた日本での連携事例については、日本カリキュラム学会や教大協(四国)など、いくつかの学会や組織での発表・シンポジウム等で報告済みである。

- 6 -

学校と美術館の不一致が、個別法はあるものの全般を規定する基本法が不在であった日本の文教政策に一因したことは否めない。ようやく昨年末に文化芸術振興基本法が制定された次第である。その成立と問題点に関して、前回のニュース・レターで藤木氏から紹介していただきありがたいと思っている。この学会ではあまり話題にもならなかったため、この法案についてよくご存じではない会員も多いと思われ、法案成立の経緯について若干の補

足をしておきたい。

文化芸術政策の基本法の制定を待望する動きは以前からあったが、諸外国の法案制度研究や文化政策の国際比較研究が1990年代に入って格段に進展し、その具体化をみるようになった。こうした状況を背景に基本法制定に向けての気運が高まり、芸団協がおよそ1年半の議論の末、「芸術文化基本法（仮称）の制定及び関連する法律の整備を」をまとめ、提出したのが昨年5月7日だった。このタイミングは小泉内閣の発足直後であることに留意されたい。

法案実現への重要な契機となったのは、5月14日の衆議院予算委員会における公明党の斎藤鉄夫議員の質問であった。40分にわたる「文化芸術振興」についての国会質問は前代未聞と、芸団協の松本理事は述べている。その前奏となったのは、ニュース・キャスターの筑紫哲也が、前任総理とは違って料亭ではなく、劇場や音楽ホールで夜を過ごす小泉首相を「変人」とアピールしたことである。5月1日、芸術文化基本法の提言をした芸団協が、林田元文化庁長官を招いて音楽に関する文化フォーラムを開催したが、筑紫はそのときの司会もつとめている。

このあと6月に公明党案が上程され、与党案、民社党案と続く。関連学会・組織等でも、これらについての意見交換がされている。その後、音楽議員連の調整を経て公明党案を含んだ与党案、民社党案が一本化され、11月16日に「文化芸術振興法案」となって上程され、国会において可決成立を見た。その間、芸術政策、芸術実践、芸術教育に関わりをもつ組織、学会、研究者に向けて芸術文化基本法（仮称）をめぐる提言が配布され、その検討が要請された。

経緯を振り返れば「国民的合意」という性格ではなかったが、藤木氏が「法案が準備されていたこと」が「芸術界の中でさえほとんど話題にならなかった」あるいは「当事者不在なのではないか」と憂慮されるほど私たちが等閑視したものでなかったというのが私の理解である。確かに美術や美術教育の当事者からみれば、今回の法案成立過程に充分関与できていなかった、という思いはあるだろう。しかしそれはむしろ、これまでの美術や美術教育の当事者がわが国の文化芸術政策や法整備に対して、どれほどの積極的関与をし

てきたかということの反映でもある。まさに藤木氏が提言されたように、私たちは「芸術文化の創造享受における主体として、その策定に参画すべく臨まねばならない」と思う次第である。

- 7 -

最後に まなざし方式 による鑑賞教育活動の各地での動向について報告しておこう。地元高知では、本年度から小・中学校および高校教員の研修に位置づけられ、教育委員会の正規の事業として予算化された。美術鑑賞教育の教員研修を、県教委と大学と県立美術館とが協力して行うという形式であって、文化芸術振興基本法を先駆ける試みとしても評価されうるものである。

香川では、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館がこの夏に「オシャベリ@美術館」という企画展を開く。「なぜ、これがアートなの」展（豊田市美、川村美、水戸芸）同様、作品について語ることを主たる目的とした画期的な展示である。担当の植松由佳学芸員とは出版パーティでの出会いが縁となり、企画に協力させていただくことになった。学校と美術館の連携は未整備ということだが、この企画展を契機に地域の学校とのつながりが生まれることを期待している。

三重では、教育改革と県民文化の向上に意欲を燃やす北川知事からの出版社へのアクセスから、県の政策研究講座として まなざし方式 のレクチャーとワーク・ショップが企画された。三重県立美術館は教育普及に関して先進的な事業展開の実績がある館だが、白石館長以下7名のスタッフの方々にもトークに参加していただき、まなざし方式 の魅力を体験していただいた。トークのあと、ボランティア・グループ櫛の会のメンバーから寄せられた「私たちの考えは間違っていなかった」という感想が印象的であった。

兵庫では、この4月にオープンした兵庫県立美術館に県立高校の教師230名が参集し、まなざし方式 のファシリテータ12名によるワーク・ショップとレクチャーがおこなわれた。芦屋市立美術博物館には、研修にご協力いただいたことをここに記しお礼を申し上げます。

このニュース・レターが届く頃には、山口県立美術館でのレクチャーが始まっている。このあともいくつかの地域が準備に入ってい

るが、各地での会員諸氏からのご協力を賜れば幸いです。

* * *

学校と美術館：辰野美術館のチャレンジ

岡田匡史(信州大学)

1. プロローグ

小・中『新学習指導要領』が学校週5日制と共に、この4月よりいよいよ実施に移された。大きな変革である。可能性を覚え期待もあるが、難しい面も多々あるのではなからうか。

「発想の転換を!」とは言うものの、慣れたシステムをやめ教育現場を変えることは難しい。縮減されてしまったカリキュラムをもっていかに基礎学力をキープしていったらよいかは、小・中の先生方にとって頭を痛める課題である。まず何にもまして時間が足りない。学校単独で教育実践をやり豊かなものにするにはもう限界に来ているのだろうか。

それから家庭。自由に使うことのできる「1日」が、突然のギフトという感じで(それ程、我が国では週6日制は疑う余地なきものであった)、子どもたちのものになったのである。このことに対し子どもも親も「何をしたらいいのだろうか?」と実際途惑っている。週末(余暇と見なすか補習日と見なすかは別にして)、その過ごし方が大きなテーマとなっている。

現況を鑑賞教育の視点からはどう捉えるべきなのだろうか。それは鑑賞教育にとって有利なのか不利なのか。否、そんな議論でなくて、それは何か新しく可能性ある方法論を生む契機となりうるのかどうか。いろいろ考えが巡る。本稿ではその辺りを記してみよう。特に後述する辰野美術館の活動を中心に。

2. 指導要領の考え方

まず『新学習指導要領』に目を通してみたい。鑑賞教育の視点からすると、大きな転回点が1つ見つかる。次は、<指導計画の作成と内容の取扱い>中の2つの文である。

- a. 「各学年の『B鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用すること。」「図画工作(第7節)」
- b. 「(前略)美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること。」「美術(第6節)」

ここに述べられているのは「学校と美術館(文によれば博物館他諸施設を含む)との連携」なる題目である。と言っても、文意は学校側から館側への活用の申し入れ、と言うか命令である。法的拘束力があるから館側は当記述を前提に連携も本務としなければならない。しかし、そんなに簡単に行くのか。

近くの(または遠くの)小・中が毎週(時に毎日)団体で館を訪れてくること、さらにはその1つ1つに最良の教育的スタンスをもって接せねばならぬことを想像するだけでも溜息が出そうである。教育普及の専門職員を配してはいても、数の限られている現下、ただでさえ業務過剰なのに、1名か2名で上記職務に当たるのは誠にシンドイと、私の知る学芸員の方が漏らしたこともある。

無論、負担の大きさだけが問題なのではない。ノウハウの解らぬ方が手探りでやっているという話も聞く。つまりエデュケータ養成の視点もないまま、「館の積極活用」になだれ込んでいってしまっているのである。

3. 曲がり角にある美術館

しかしながら、館自体がこれまでのやり方、例えば珍しい啓蒙的企画をトップダウン式に打つだけでは集客できなくなっているのもまた事実である。不況によるのか、これまでの鑑賞教育が行き渡らなかったことによるのかは定かならぬが、来館者数が減り出し、予算措置が難航し、閉館も相次ぎ、美術館を巡る状況は悪くなるばかりである。美術は嫌われてはいないのだけれど、フィレンツェ、トレドの市民らが示すような積極的愛護の対象であるとは言いがたい。パソコンや携帯電話の普及が象徴するごとく、プラグマティックに生きることの風潮も影響していよう。

そこで言うは易しなのだが、館は経営力を鍛え、機関誌・HP・ポスター・チラシなどの教育的機能を再考して、広報サービスも含

む広い意味での教育を展開し、敷居をなくし、対話型の諸策を講ずることが必要となってきた。鑑賞を手助けするワークシートの作成、サイトによる神経の行き届いた情報提供、ビデオ・LDの視聴コーナーの設置、ギャラリー・トーク、市民参加型のワークショップなどが、今、諸館で試みられている。アメリカ的でこれこそプラグマティックではあるが、それらを漠然とやるのではなく、学校・家庭をターゲットに行うことにより戦略的実効性を高めると考えるのが、経営的発想ということになる。

4.辰野美術館との出会い

そんなことをよく思うようになっていたとき、辰野美術館との関わりが始まり、館の在り方などについて考える貴重な機会を得ることができた。館長は小松舎人氏。この館は、昭和53年に「辰野町郷土美術館」の名でスタートし、平成8年に今の名に変えられている。学芸員1名の、小さいがヴィジョンとプログラムのしっかりした典型的な地方美術館である。

当館のロケートする辰野は、天竜川の流れる伊那谷北端に位置し、松本・諏訪などにアクセスしやすい。R153沿いには古い瀟洒な家並が残し、稲田が拡がり、厳しくとも自然の恵みの豊かな風光明媚な町である。しかし、文化活性力に関してはどこもそうではあるがなかなか高まることなく、館はまさに開墾し種蒔くことを堅実に続けているところである。荒神山公園に建つ、金閣寺風の建物は、中央高速道からも見ることができる。

私は、昨年度、〈将来構想研究審議会委員〉として、一昨年度は、〈『親しむ博物館づくり事業』企画開発委員〉として、当館と関わりをもった。2つの活動内容について次に記させていただきたい。

5.2つのワークショップ・プログラム

『博物館づくり』の方は、県内初となるワークショップ・プログラム「アート探検術 ふれる・みつめる・おとずれる」の運営がメインであった。アーティスツ3氏(天野惣平・北澤一伯・木村仁)がワークショップを担い、信大生を含むヴォランティア・スタッフが積極的にサポートした。地元の小・中・高の先生方3名と長野県総合教育センター専門主事も委員に加わるなど、館の活動の学校への拡がりも明瞭に意識されていた点の特記したく思う。北澤氏のWSでは、委員の1人、篠原香苗

先生(辰野中)+16名の教え子さんたちが参加し大活躍することとなった。親子連れも目立ち、「館と学校との連携」また「地域に開かれた館」といった面で、かなりの成果を上げていたと見ることができる。週5日制を先取りする試みでもあった。

この趣旨は、昨年度、催された同種のプランである「アート・アドベンチャー・イン・たつの」に受け継がれることになる。そのときは笠原由起子・大木道雄と前年度メンバー天野3氏がインストラクションに当たった。

なお両プログラムとも文科省委嘱事業である。「アート探検術」の方については、赤羽義洋学芸員によるレポート(『ドーム』第56号 pp.11-12.)を読みたい。

6. 審議会での話合

次に審議会のことだが、この会ではもうじき開館25周年を迎えんとする館の問題点を洗い出し、それらの検討を踏まえて、これからの館の像の具体案を練ることをメインとした。財源・ニーズ・立地条件・入館者数など、ハードな諸課題のクリヤを強いられ、それゆえ、創意と智慧の要る、市町村立レベルの地方美術館の1モデルケースとして、辰野の活動は注目されてよいように思う。谷新館長(宇都宮美術館)・小坂広志学芸室長(川崎市市民ミュージアム)、それから長野を拠点にアート&クラフトと芸能の分野で優れたオーガナイゼーションをなさってきた石川利江さん(地域文化企画室代表)、地元からは長田源康氏がメンバーに加わり、毎回、熱心に議論し、情報交換がなされた。

この審議会はメインテーマが「館の存立」というシビヤなものではあったが、私には「学校と美術館との連携」などを考えるきっかけを数多く得る機会となった。企画はやりっ放しでは駄目であり、1つの企画を打つ際にも、それを成功させるべく文化土壌を耕すような、広報・教育の充実を図ることが必要との意見が出されたりした。私は、館の存立は小・中との連携にかかっていることを再三発言した。週5日制を視野に入れての連携が、今、最も現実性を帯びた課題の1つとなってきたからである。文化振興はトップダウンではもう限界がある。小さな子どもたちにアートについて語り知らせ学んでもらう場を設けることから、ジェネレーション全体の文化活性力を引き上げ、延いては地域の文化水

準を高める，そうしたボトムアップこそ，たとえ時間がかかろうとも，否，むしろ時間をかけて取り組むべきものではないかと訴えた。親子向けの良質なワークショップを定期的に催し，そのノウハウを蓄積していくこと，また活動は必ず自己評価し，簡略でもいいからレポートをまとめること，それを報じること，参加者の意向を問う調査も怠らぬこと，そうした取り組みの内に館は地域に堅く根を張るものと信じている。

7. 館と辰野中との連携

目下，ワークショップを機に，近くの(と言っても，徒歩だと特に降雪期は大変だが)辰野中との連携が進んでいる。これに絡むのは，元信大附属長野中の依田浩巳先生である。館蔵品のディテールを撮った36カットを手掛かりに，1-1の生徒たちが作品を探すという，楽しい鑑賞ゲームが昨年11月に行われた。赤羽さんは『美術館だより』第21号に「ディテールから全体を見る，全体からディテールへ目を向けるという訓練は，鑑賞に際しては重要な点です」とのコメントを書いている。この1文を先生や子どもたちが読むことでも，館・学校間に価値ある交流が生まれていく。なお，当企画は長野県総合教育センターの図工・美術科教育研修講座によるものである。連携型の鑑賞教育はこれからも行っていくことが決まっている。

上記センターの五味一男専門主事は『ワークショップの記録』に，連携の進めぬ要因として，時数の少なさ，遠いこと，交通の便の悪さ，日程調整の難しさ，館の活動が知られていないことなどを挙げている。近いメリットはあるものの辰野中も他校と条件はそう変わらない。先生と学芸員とが意見を交換し合い，膝突き合わせて活動案を練り上げていく，初めは恐らく面倒に感ずるであろう，このプロセスが事態を打開していったのだと思う。

情熱や意欲や使命感，これらも大切である。審議会に向かう途中，生徒を引率し，館での授業から戻ってくる篠原先生にお会いしたことがある。生き生きとした表情をされていて，「よくやられているなあ」という感想を抱いた。また，館に関わり驚いたことがある。それは何から何までほとんどすべてを赤羽さんお1人がやっていることである。どこからそんなエネルギーが湧いてくるのだろうか。この仕事が心底お好きなのである。

しかし，本当は学校にも美術館にももっとゆとりがあったらいいのと思う。余りに忙しいと感性は乾涸び情操も育めない。日本全体にゆとりが，せめてアートを楽しむ位のゆとりがあってもいいのではないか。週5日制によってそれがもたらされないものだろうか。そんなムーブメントを学校と美術館とが力を合わせて創り出せたら最高だと思う。

8. 行政の支援

最後に行政サイドのことについても触れておきたい。辰野町教育委員会の方々：一ノ瀬健二教育長・武井誠生涯学習課課長・三浦孝美同課課長補佐3氏がとても熱心なのである。宇都宮美術館の視察の折も，赤羽さんの運転で皆来られている。各々の方が館のこと・学校教育のことに高い問題意識をおもちである。こうした点も特筆に値しよう。

9. エピローグ

連携を土台として，子どもたちに本物のアートに接する鑑賞体験をさせようと思ったら，やはり人と人のネットワークが大事になってくる。辰野にはその拡がりが見られる。歩み出したばかりとは言え，確かな可能性を感ずる。種が蒔かれれば必ず芽が出る。今そんな思いで辰野の活動を見守っている。



北澤氏のワークショップ「<脱構築>。こころの容器(かたち)」のワンシーン：場所=辰野町商工会分館。第2日目(2000.11.11)終盤の床を磨く作業を，辰野中の生徒さんらが黙々と行っている。感想を聞くと，「楽しい!!」という応えが返ってきた。

* * *

特集「教育課程を創る」(3)

「循環型造形活動で 総合学習の根っ子になる」

橋本忠和

(兵庫県宍粟郡一宮町立繁盛小学校)

1. 過疎化からの脱却

私が住む一宮町は深刻な過疎化からの脱却のため、森の資源を活用した廃棄物ゼロの資源循環型社会をめざすゼロエミッション構想に取り組み、地域を活性化させ若者をリターンさせようとしている。このシナリオは造形教育においても生かすことができる。時間数削減や総合的な学習と基礎学力の定着が注目される教育の潮流の中、造形教育は益々周辺教科と扱われ、過疎化状態である。造形教育は、その存在意義を示し、総合的な学習の時間等に切り込んで、生き残りを模索しなければならない時期にきている。

2. ゼロエミッションの視点を生かして

造形教育が生き残るヒントは、地域の伝統的なものづくりの中にあるゼロエミッションの視点を造形活動の中に取り入れることにありと考える。なぜならば、身近な素材を無駄なく生かし切る視点を日々の造形活動に取り入れるならば、地域にある様々な生業における自然と共生するための思想や技術を見抜くことになり、地域に関わる造形活動の題材が循環型へと多様化すると思われるからである。また、資源循環型の知恵と技を探求的に学び取ることは、総合的な学習の「探求活動に主体的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」というねらいを具現

化することにつながる。

3. 循環型造形活動の学習システム

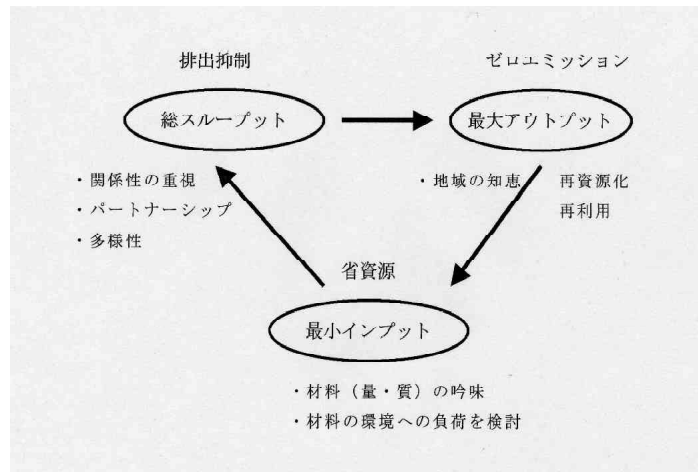
循環型造形活動が目指すものは終末のゴミ処理をゼロにしてゆくことである。よって、図1のような循環型造形活動の学習システムの展開を考えてみた。以下各段階を説明する。

(1)最小インプットの段階

この段階では、児童に与える材料の量と質を十分に考慮して材料を選択しなければならないのは無論のことであるが、さらに子どもが地域に向ける学びの視野を広げるために地域との関わりを生かす視点で材料選択を図る必要がある。

(2)総スループットの段階

ものは使い切ってこそ生かされる。例えば、藁は数十年前までは、そのすべてが無駄なく使い切られてきた。しかし、現在は、ものの命を十分使い切っていない活動が横行している。よって、豊かな暮らしを豊かと感じ、その豊かさを大切にしたいと思うなら、個々がものの使い捨てから、ものの命の終わりまで使い切るといった考え方に換えていく必要がある。



(図1 循環型学習)

(3)最大アウトプットの段階

子ども達が活用した物質は、環境負荷が最小の造形過程を通してリユース・リサイクルできる資源として排出される。しかしながら、廃棄物ゼロの現実、子どもと教師にとって難しい課題である。だが、それを打開する鍵

も、地域のものづくりに生きる知恵や技の中にある。よって、教師は、地域のものづくりを探る必要がある。なぜならば、伝統的生き方の中には、エコロジカルな生きる知恵が数多く存在していると思われるからである。

美術教師が、地域や専門家・教師間で連携し合った人材ネットワークを形成し、とぎれのない物質循環が行われる学習システムを構築できれば、図工室から環境に負担をかける資源のムリ・ムラ・ムダを追放できる実践を発信でき、循環型社会創造の根っ子として、他教科の時間に切り込んでゆけると考える。

* * *

美術館と学校の連携をめぐる覚書き

塚田美紀（世田谷美術館）

世田谷美術館では、区立小学校4年生の展覧会鑑賞＝「美術鑑賞教室」が開館以来16年間続いている。6年前からは、来館に先立つ希望校むけの出前授業＝「特別プログラム」も始まった。私はこの「美術鑑賞教室」と「特別プログラム」担当になって3年目である。美術館と学校を往復すると様々な出来事に出会う。

昨秋行われた「勅使河原蒼風」展向けのあの「特別プログラム」でのこと。教室には学校中からかき集めた雑草や木の枝が山と積まれていた。「好きな草を好きなように使って、いつもの教室を変身させてみようよ。」生け花・草月流の初代家元であり稀代の造形作家でもあった分類不能のアーティスト、勅使河原蒼風の創作エネルギーを、子どもたちが自身の内に見出すきっかけをつくるための授業である。

教室はすぐに興奮に包まれた。時計や黒板の周りに丹念に蔦や蔓を這わせていく子、すすきや笹を束で使って掃除用具入れを怪しげ

なオブジェに仕立てる二人組、窓の棧を草で覆い隠し、ガラスに「ジャングル」と丸い実を並べて書いたグループ...担任の先生の事務机も華やかにデコレーションされ、廊下の隅にはいつのまにか鬱蒼とした“秘密基地”ができていた。子どもたちは止まらない。

この出前授業、悪い言い方をすれば一過性のイベントである。イベントの意義は、子どもや学校の日常に確実に楔をうつような瞬間を現出させ得るかどうか、ただ単に消費されてしまうことのない何かを提供できるのか否かにかかっている。これは難しい課題だ。楽しく盛り上がりつつも後に何も残らない危険は高い。

今回はわりといい線を行ったかな、と思う頃にチャイムが鳴った。「しばらく残しておきたい」という子どもたちの声を背に、担任の先生は「あぶないから」と“基地”の分厚い草屋根を取り除け始める。黒板や事務機の装飾もはやばやと片付けられていった。「ジャングル」は再び四角い白い部屋に戻っていく。

一時の非日常を演出すること自体よりも、非日常から日常に戻る、その戻り方が実はいちばん重要なかもしれない。風船がいっぱい膨らんだところで針を突き刺すような終わり方は無残である。またいつでも膨らむことができる、そういう緩みが要る。この出前授業に限らず、子どもたちが美術館にやってきて学校に帰っていくときもそうだ。時間がきたらハイさよなら、美術館を出たらハイおしまい、というリセットではなく、非日常と日常の緩衝地帯、次につながっていくための余裕をさりげなく用意すること。それを可能にするのは学芸員と教師の地道なコミュニケーションだろう。

美術館と学校の連携というとき、学芸員や教師が授業や教材をつくったり互いの施設に出向いたり、という目に見えるプログラムを実現していくことはもちろん重要だ。だがそのとき、アートをめぐる子どもの経験を包む、いわば余韻のような見えない部分をも、ともに手探りできるかどうか。そういう部分を射程に入れた模索と議論が、「連携」の試金石になるように思う。出前授業であれ美術館訪問であれ、一過性のイベントを意味ある瞬間として立ち上げてくれるのはそこである。

授業後、教室から草を掃き出す子どもたちの表情は妙に淡々としていた。それが充実し

た時間の証なのか、あるいは断ち切られた経験への諦めなのか、私には俄かには見定め難かった。不意にある子どものつぶやきが耳に飛び込んでくる。「どうせ壊しちゃうなら、こんなに一生懸命つくるんじゃなかった。」一瞬凍りついた私に、別の子どもが「また来てね」とはにかみながら握手を求めに来る。こんな具合に、今日も私たちのプログラムは続いている。

* * *

新刊紹介

直江俊雄『20世紀前半の英国における美術教育改革の研究 - マリオン・リチャードソンの理論と実践』

編集ご担当者より、ご依頼をいただきましたので、僭越ながら自著の紹介をさせていただきます。本書は、1993年頃より進めてまいりました英国の美術教育に関する研究をまとめ、2000年3月に学位授与を受けた同タイトルの博士論文をもとに、2002年2月、日本学術振興会科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の助成によって出版したものです。

周知のように、20世紀前半の英国における初等・中等教育の美術学習は、大きな変革期にありました。それは、学習者自身の感覚や思考に基づく個別的な表現を共通の課題とし、すべての人が表現の主体者として固有の価値を生み出しうる存在である、とする理想を共有した、学習者中心の教育を志向するものであったといえます。

マリオン・リチャードソン(1892-1946)は、

英国中部地方のバーミンガム美術学校に学び、地方の中等学校での指導を通して子どもたちの内面的イメージを重視した独自の教育方法を発展させ、のちにロンドン市美術視学官として、改革の中心的役割を果たしました。その成果は美術批評家ロジャー・フライやハーバート・リード、美術史家ケネス・クラークらの熱心な支持を受けて注目を集めました。具体的な方法や理論の形成過程には不明の点が残されたままでした。

本書は、近年新たに公開された当時の未刊行資料の現地調査にもとづき、リチャードソンの美術教育論と実践の解明を通して美術教育史研究に新たな視点を提示するとともに、今日までその影響を残す20世紀前半の美術教育改革の意味を問い直そうとするものです。

第1章「思想形成と初期改革」・第2章「美術教育改革の展開」において歴史的な事象や影響関係の解明を行い、第3章「前期講演原稿」・第4章「後期講演原稿」では、リチャードソン執筆による一連の未刊行講演原稿の解読をもとに、その美術教育に関する思想の発展過程を明らかにすることを試みました。第5章「内面的イメージに基づく教育方法」・第6章「教育方法の全体構造とその適用」において、リチャードソンが適用した教育の方法と、その成果を示す子どもの作品について、実際の資料にもとづいて検証を加えています。

特に、当時の資料を詳細に読みとることによって、子どもたちと現代美術の現場との相互交流の結節点となる教育者の中で、独自の理論と方法が形成される過程を示すことができた点、これまで看過されていた「マインド・ピクチャー」と呼ばれる独特の方法について、約500点に上る作品群のデータベース化をもとに、その特質と役割を明らかにすることができた点、学習者中心の教育と美術への知的接近とが相反するものではなく、根底において一致したところに近代における美術教育改革の基点を見いだした点、学習者中心の教育への転換の質が再び問われる現代への導入の示唆などは、本書における到達点の一部であると考えています。

駆け出しの研究者の初期の通過点です。今

後、これ乗り越える仕事を展開できるよう、
ご叱正・ご批判をいただければ幸いです。

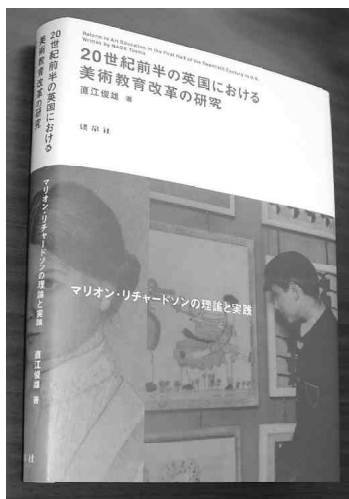
お詫びと訂正

直江俊雄（筑波大学）

発行：建帛社 2002年2月

定価：12,600円（税込）

ISBN4-7679-7046-6 C3037



学会通信44号（前号）にご執筆いただいた藤木周氏の原稿の一部が欠落していました。編集の際の不手際です。藤木先生をはじめ、会員みなさまに多大なご迷惑をおかけいたしましたことをここにお詫び申し上げます。

なお、藤木先生の原稿につきましては、全文を学会通信45号（本号）に同封してみなさまにお届けすることとさせていただきます。

事務局から

「入会申込書を送付したのに音沙汰がない」「年会費を納入しているのに学会誌が届かない」といった苦情をいくつかお受けしています。事務局が和歌山大学から東京学芸大学に移転する際に取りこぼしが出てしまったか、日本学会事務センターへの連絡の際の不手際が原因と考えられます。会員みなさまにはご迷惑をおかけいたします。ご連絡をいただいた場合、早急に対応させていただいていますが、今後不備やご不明な点がございましたら事務局までご連絡下さい。

なお、今後は事務局が入会希望者から入会申込書をご郵送いただいた際（申込書は当学会のホームページからダウンロードできます）入会申込書が事務局に届いた旨ハガキ等で通知させていただくことといたしました。事務局に届いた入会申込書は学会役員会・総務会等において理事の承認を得たうえで、日本学会センターへ回送いたします。その後入会された方にセンターから直接年会費の振り込み用紙等が郵送されます。

Webでも詳細を紹介する予定です。
<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/naoe/>

* * *

新入会員のお知らせ

辻 克巳（森村学園 初等部 図工専科）
三浦初美（同志社大学 大学院）
矢木 武（豊島区立豊成小学校 教諭）
宮野 周（群馬大学 大学院）
森 邦彦（大阪成蹊女子短期大学 助教授）
和田 学（筑波大学 大学院 博士課程）
古屋旭代（筑波大学 大学院 博士課程）
近藤恭弘
張 亜菲（三重大学 教育学研究科）
上西知子（北海道大学 大学院 教育学研究科 後期博士課程）
井口和子（大阪総合福祉専門学校 児童福祉科造形専任教員）

* * *